



大好きな地元の福井のために、
自分にできることを

福井銀行本店内で地域に開放しているライブラリー「WiL」にて

株式会社福井銀行 経営企画グループ
経営企画チーム統合推進室 織田瑞花さん

おりた・みずか ●1994年福井県生まれ。福井県立勝山高校、神戸女子大学文学部教育学科卒業後、地元である福井にUターンし株式会社福井銀行入社。支店での窓口・法人営業、本部での営業支援グループを経て2023年より現職。2026年の福邦銀行との合併業務に尽力。

福

井出身で高校までは地元で育ちました。でも、都会へのあこがれがあり、大学の進路選択では神戸の大学に進学しました。神戸での生活も

楽しかったのですが、福井の自然豊かな環境や家族が恋しくホームシックに。就活時に人生の歩み方を考え、働くだけでなく日々心地よく過ごすことが大切だと思い福井に戻る決意をしました。金融機関を選んだのは、人が好きで、多様な年齢層や職種の方々と関わりながら仕事ができると思ったからです。地方銀行は地域のお客さまのために存在していますが、福井銀行は特に「地域の課題解決」と銘打ち、グループ会社を含め、金融に限らずコンサルティング、DX、観光など幅広い分野で余すところなく地域課題に取り組んでいて、その一員となれていることに誇りを感じています。

私自身の仕事では、営業店で法人営業を担当していたコロナ禍のときに、製麺所を経営するお客さまのご相談を受けました。従来、生麺を作っていた企業でしたが、時節により「保存がきく乾麺を作りたいがノウハウがない」とお困りだったのです。私が担当するお客さまだけでなく福井銀行のお取引先には乾麺を作る会社、具材をフリーズドライする会社、パッケージをデザインする方などがいらっやいます。行内の先輩や同期にも相談しながら市内でそれらができる企業を結び付け、地

域全体を巻き込んでお客さまの課題を二人三脚でゼロベースから解決するお手伝いできました。こうした事例が行内には多々あるのです。

業務上で地域課題に取り組むだけでなく、現在、福井県全体の課題に取り組みたい気持ちがあり、行内の有志が集まるDEE (Diversity, Equity & Inclusion / 多様性・公平性・包摂性) 推進の活動もしています。福井県は女性の就業率は全国トップクラスなのに、男女の賃金格差や役割格差などが大きいというデータがあり、女性が活躍しにくいというイメージを県民自身がつけている気がしていました。例えば、高校の同窓生でも県外に進学した女性に戻つてこないことが多いと感じていました。福井銀行では2022年からDEE推進に力を入れて活動しており、アンコンシャス・バイアス※チェックや研修などの取組を始め、行内の意識が変わり始めています。そうした取組に賛同してくれる福井県内の他企業と共に進めていて、私も施策立案に参加したり、社内の好事例を他社に紹介したりしています。

福井にはメガネなどの地場産業も多いです。営業時代の経験から、働きやすく、魅力的な企業がたくさんあることを知っています。大好きな福井が、女性だけでなく一人ひとりにとってもっと働きやすい地域になるよう、自分にできることをやっていきたいです。

※アンコンシャス・バイアス…無意識の偏見や思い込み

CASE
2



やってもらったことを、
日々の仕事で返しています

福岡市漁業協同組合姪浜支所 野上隆昌さん

のがみ・たかまさ ● 漁師の家に生まれ、親からは「厳しい世界だから継がなくていい」と言われ、大学卒業後に食肉加工会社の営業職に就く。5年後、自らの意志で漁師になり、消防団にも所属。福岡市の各区の消防団は、1月の出初式で披露する「まといぶり」という伝統芸能も継承しており、その担い手も務める。

博

多湾で漁師をしています。5月から7月は鯛などを獲るごち

網漁。8月から4月は海苔の養殖。海苔は市内の学校給食にも出していて、学校から依頼があれば海苔の作り方の出前授業もします。地元の消防団にも所属しています。水難事故があれば船で出動し、救助活動にあたるんです。夏の海水浴の時期には週1回くらい出ることもありますね。救助のための訓練も年に数回行います。

地元の姪浜は、昔は漁師だらけの街でした。父ちゃんが漁に出て、帰ってくると仲間と一緒に酒を飲み、そこに子どもたちも交じって遊ぶ。そうした日常を通して、楽しそうな仕事だと思っただんです。漁師の朝は早く、目覚めると両親が家にいないこともあり、でも隣のおばちゃんが居てくれたりと、周囲に見守られながら育ちました。だから漁師になったときに、消防団にも入って海の見守りをしよう、と自然に思いました。地域のためとか大げさな話ではなく、自分がやってもらったことをやっている感じです。

漁師を続けるなかで考えが変わったこともあります。最初は、漁に出れば魚が獲れるし、海苔網を海に張れば海苔が採れる、という感覚だったんですよ。ところが最近は、毎年毎年、今年が一番悪いというような漁獲量や生産量が續いている。自分たち姪浜の漁師はこの海を借りているのであって、このまま

だと博多湾での漁業を次の世代につなげることができなくなる、と思うようになってきました。

例えば姪浜産の海苔は、以前は知名度のある有明産に値段で負けていたのを、地元の代々の漁師が味付け海苔など加工品も売り出し、30年かけて口コミで評判を呼び、全国に販路を拡大してきました。その灯を絶やさず未来につなげたい、という思いは、我々の代にもあるんです。

そこで、どうすれば豊かな博多湾を取り戻せるか探ろうと、水産海洋技術センターなどの専門機関に教えを請い、漁師仲間でも毎週、水質調査もしました。わかったことは、下水処理場の整備により、川から海に流れ込む水がきれいになりすぎて、海苔や魚の栄養分となるリンや窒素が不足していたことです。自分たちで声を上げ、市の下水処理場と定期的な話し合いを始めました。現在は、海を汚染しない基準を守りつつ、栄養分を除去しすぎない処理をする工夫をしております。

思い返せば、父ちゃんたちの代の漁師は、植林もしていたんですよ。山に木を植えにい。当時は「そう言ってみんなで酒を飲みに行きよるだけやろ」と見ていましたけれど。そうした取組も、山から川、川から海へと栄養を巡らせて、博多湾の漁業を次の世代につなげるためのものだったんだな、と今になって思います。



地域の食と人のつながりが
私を成長させてくれる

株式会社エルサン フード&ビバレッジ事業部
主任 佐藤 渚さん

さとう・なぎさ ● 1997年山形県鶴岡市生まれ。山形県立庄内総合高校、酒田調理師専門学校卒業後、結婚式場のグランドエル・サンを運営する会社に就職。2023年、鶴岡食文化創造都市推進協議会主催「第3回次世代ガストロノミーコンペティション」グランプリ受賞。

山 形県鶴岡市の結婚式場グランドエル・サンで料理人をしていま

す。地元の鶴岡は、在来作物※の多さや郷土料理の食文化を評価され日本初のユネスコ食文化創造都市に認定されました。私は2023年に市の「次世代ガストロノミーコンペティション」(以下、コンペ)に参加してグランプリを受賞。それ以来、郷土料理に関するさまざまな活動に参加させていただいた経験から、この素晴らしい食文化を地元の人や、子どもたちに伝えていきたいと考えています。でも実は、コンペに出るまで、鶴岡の食文化のすごさにまったく気づいていませんでした。

父が料理人、祖母も料理上手で祖母の家庭料理が郷土料理だったので、自分にとっては当たり前の日常。おいしいものを作って人を喜ばせられる祖母や父をカッコいいと思っていたので、漠然と料理人になりたいと考えていました。高校時代の進路選択でその気持ちが高まり、調理の専門学校に進学後、現在の会社に就職しました。

新人の頃は料理人としての技術を磨くことばかり考え、料理人の娘というプライドもあり突っ張っていたこともありましたが、でも、ある日恩師である当時の料理長から、「お客さまのためにおいしいものを作りたいとか、喜ばせたいという気持ちを含めて作らないと、いくら技術が高くても喜んでももらえないと思うよ」と言われて。自分が料理

人を目指した原点を思い出はっとしました。

恩師が定年退職するタイミングでコンペの話聞き、自分が成長した姿を見せられたら恩返しになると考えて参加することにしました。コンペのテーマは「郷土料理や在来作物といった鶴岡独自の食文化や歴史の伝承」。さらに、在来作物の生産者や郷土料理の指南役とペアでメニューを開発することが条件でした。職場に、いつも手作りの差し入れを持ってくる佐藤八重さんという方がいます。祖母の味を思い出し、祖母と重ねて見ていた八重さんに指南役をお願いしました。

参加を決めて初めて在来作物を調べ、その多さに驚きました。鶴岡市羽黒町松ヶ丘は旧庄内藩士が開墾してきた街。街を歩いて当時の藩士たちの気持ちを想像したりしたときに、彼らがいなかったらこの街も自分も存在していなかったと気づきました。そして、松ヶ丘の郷土料理「いもごぼたもち」を再構築し、一皿の中で鶴岡の風景と、過去・現在・未来を表そうと考えたメニューでグランプリを受賞できたのです。家族の存在、恩師や八重さんとの出会い、刀を鍬に持ち替え庄内を立て直した庄内藩士に思いを馳せることを経て、技術を磨くだけでなく地域の食文化を次世代へつなぐ視点をもてました。鶴岡は、料理人として、人間として私を成長させてくれる場所です。

※在来作物… 特定の土地で長年栽培され、種苗の維持がされながら、地域の食文化に根づいてきた作物

CASE
4

採石業だからできたことが、
地域の新たな魅力に



蛇島開発株式会社 代表取締役
中村 旦さん

なかむら・あきら ● 1985年広島生まれ。崇徳高校、愛媛大学工学部卒業後、日立建機株式会社入社。3年半勤務した後、広島で実家が経営する中村砕石株式会社に入社。同社が吸収合併した山口県周南市の蛇島開発株式会社の3代目代表取締役社長に2024年に就任。翌年から「周南爆破」の事業を始める。

「採

石業」と聞いてどんな業種かイメージできる人は少ないのではないだろうか。山や岩盤を砕いたり

爆破させて基礎石材を採石する事業で、私にとっては祖父の代から続いている家業です。幼少期から重機がかったい

いと思っていたことや、経営者として尊敬できる祖父や父の姿を見て、採石業

はあこがれの仕事でした。大学卒業後、修業のために建設機械の会社就職

しましたが、3年半後に、父が二代目として継いでいた中村砕石に入社しまし

た。広島が本拠地で私も広島出身です。現在私は、山口県周南市にある関

連会社の蛇島開発で社長を務めています。広島から通勤していますが、昨年

まで所属していた周南の青年会議所（以下、JC）の仲間とのつながりから、

私にとつての地元は今では周南だと感じています。

当初、JCの仲間にも採石業と自己紹介しても「何をしているの?」と。採石業は都市開発にはなくてはならない仕事です。原野に工事関係の仮設事務所を建てる段階から、地盤を造るために石が必要。開発の最後に造るのが道路で、アスファルトの下には石が敷かれています。地図が変わるような大きな仕事の最初から最後まで関われる不可欠な仕事なのに知られていなかったのです。

自分たちだからこそできることで採石業の認知度を上げたいと考えていた

2024年、爆破

を観光にして体験

ツアーを行っている

栃木県の会社がテ

レビで紹介されて

いました。爆破は

我々の業務の一環

です。自分たちにもできるかもしれな

いと思い、その会社に見学に行かせて

いただいたところいろいろ面白いア

ドバイスを下

下さし、半年後には自分たちで「周南

爆破」という新事業を立ち上げました。

炎と煙の爆破を身近で体験していた

だき、撮影会をするツアーです。

プレスリリースを出すのと地元のテレ

ビ局などで紹介され、コスプレイヤーや

ご当地ヒーロー、結婚記念の撮影など、

たくさんの方に来ていただけるようにな

りました。周南爆破とともに会社と

採石業の認知度が上がり、地元の徳山

高専から課題解決型授業への協力を

要請されたり、市役所からふるさと納

税の体験型返礼品にしたいと依頼が

来たり、地域とのさまざまなつながり

が生まれています。何より、従業員のモ

チベーションが上がったことが嬉しか

かったですね。採石業では当たり前の爆

破が、地域の方々からこんなにも喜ん

でもらえることを目の当たりにして、

自分たちの仕事に誇りがもてたよう

です。採石業の認知度を上げたいという想

いが、周南という地域と会社の活性化

につながりました。



誰でも爆破体験と撮影会ができる「周南爆破」。ご当地ヒーローとのコラボ写真も注目を集める。
©清流光神ハクジャオー



地元の太田市美術館・図書館にて

分断を緩和する
クッションになりたい

am国際行政書士オフィス 代表行政書士
井手口睦美さん

いでぐち・むつみ●中学や高校を群馬県太田市で過ごし、大学でブラジルに留学。大阪で商社に勤め、結婚を機に鳥取県へ。行政書士の資格取得後、外国人支援のニーズの高い太田市に家族で戻る。高校時代は勉強よりもバンド活動に熱中。「私が行政書士になった、と当時の先生が知ったらびっくりされると思う」とのこと。

外

外国人住民数の多い群馬県太田市で、行政書士として帰化申請や在留資格の手続きをサポートしています。また、隣の伊勢崎市で外国人の子どもたちの日本語教室の代表も務めています。こうした活動を始めたのは、中学と高校をこの地で過ごすなかで、日本人と外国人の分断を感じ、何とかしたいと思ったからです。当時、日本語が不得意な外国人の生徒たちは仲間同士で固まり、一方で私たちも、言葉の壁があつてその子たちと積極的に関わろうとしなかったんですよ。

私が日系三世[※]で、宙ぶらりんの状態にいた影響もあります。日本で生まれ育ち、日本語を話しているのに、親の出生の関係で国籍はブラジル。ずっと葛藤がありました。大学生のときにブラジルに1年間留学すれば、ポルトガル語が下手で「国籍は同じでもあなたはブラジル人じゃない」とされる疎外感も味わいました。思春期に悩んだからこそ「過去の自分のような子どもに対して、力になれる大人でありたい」と思つたのです。

大学卒業後、日本国籍を取るために帰化申請。書類を揃え、許可が下りたとき、初めて足元が定まったような感動を覚えしました。と同時に、手続き面では古い情報や嘘の情報が回っているのを痛感しました。私は、外国人に対する風当たりが強まっているように感じられる昨今の現状も、この「手続

きの問題」と無関係ではないと思つています。正しい情報にアクセスできずに手続きの不備が生じ、国が厳しい対応を取らざるを得なくなる。その背景が見過ごされたまま、メディアなどで双方の感情だけが拡散され、対立を生んでいるのではないのでしょうか。

外国人の方々に正しい情報、一次情報を、易しい言葉で伝え、「日本で胸を張って暮らせる」ように支援したい。そうして日本をより好きになつてほしい。分断を少しでも緩和していくクッションのような役割を担えたら、と思うようになりました。

まず試したのがポルトガル語での動画投稿。でも「何者でもない私」では支持されませんでした。そこで働きながら朝と夜に勉強し、3年かけて行政書士の資格を取り、開業しました。とはいえ当時は20代の若輩者。地域ですぐ信頼されたわけではありません。群馬県行政書士会太田支部に入り、積極的に運営のお手伝いもし、地元ですつとやってこられた先生方と交わりました。そうした地域のキーパーソンの方々は、若い人のバイタリティを求めてもいて、多方面につないでくださったんです。日本語教室の子どもたちには、「小さなことからいいので、好きなことを怖がらずにやってみよう」と伝えていきます。「やりたい」と思つたことの勉強は何歳からでもできるんだ、と、私自身も身をもって学んだからです。

※日系三世…日本から海外に移住した日本人の第三世代。井手口さんの場合は、祖父母がブラジルに移住、現地で生まれた父母が日本に戻り、以降に生まれた。このケースでは出生時は親と同じブラジル国籍となる。

CASE
6



仲間とつながる楽しさが、
町の未来を創るんです

耕作放棄地を再生した梅畑にて

岡本農園 代表／株式会社日向屋 代表取締役
岡本和宜さん

おかもと・かずのり ● 1979年生まれ。ホテル勤務を経て、和歌山県田辺市の実家・岡本農園を承継。鳥獣害対策のための狩猟チーム結成や、ジビエ解体・加工施設「ひなたの杜」創設を主導。2018年に株式会社日向屋設立。同社の取組は令和4年度鳥獣対策優良活動表彰農林水産大臣賞ほか受賞。

うちは祖父の代から紀州南高梅とみかんの農園を営んでいて、25歳のとき、長男としての自分なりの責任感から、県内のホテルを辞めて実家で農業を継ぎました。サービス業から一転、何もしゃべらない梅やみかんの木と向き合う毎日。人との関わりが少ないことがストレスで、最初は楽しくありませんでした。

あるとき、農家の儲けが少ない構造に疑問をもち、提示された値段で卸すのではなく、「自分で生産した物に、自分で値段をつけて売りたい」と考えるように。みかん生産の少ない他県の道の駅に目をつけ、得意のコミュニケーション力を活かして、「おいしいみかんを作っているので販売させてください！」とガンガン飛び込み営業して回り、少しずつ直販に移行。梅についても、独自に販路を開拓していきましました。そのなかで農業が面白いと感じるようになっていき、自分はただ作るだけでなく、人と人をつないで課題解決する「サービス業」なのだと思いついたのです。

そのころ地域では、シカやイノシシが農作物を食い荒らす獣害が急増していました。自分たちの畑は自分たちで守るしかない、地域の若手でチームを結成し、狩猟免許を取得。力を合わせ、1年間で約120頭を捕獲しました。地域の方にも感謝され、私も嬉しかったのですが、次第に人の都合で命を奪う行為にしんどさを感じるようになりました。

鳥獣害対策抜きにはできない農業を、地域の子どもたちはやりたいと思うだろうか、危機感をもちました。

そこで、動物の命に感謝してジビエとして無駄なく活かす仕組みを作ろうと、ジビエ解体・加工施設の創設に向けて動き出しました。人づてに出会った腕利きのジビエ職人を「一緒にやろう」と巻き込み、地域住民にも丁寧に趣旨を説明して賛成を取りつけて施設を開設。市外の農家にも広く協力を呼び掛け、安定的にジビエ生産・販売ができる仕組みをみんなで作りしました。

鳥獣害の背景には、耕作放棄地の増加や農家の後継者不足などさまざまな課題があり、根本的な解決には新規就農の拡大が不可欠です。その仕組みづくりのため、狩猟チームの仲間と日向屋を設立しました。耕作放棄地を再生し、そこに新規就農者を呼び込み、農産物の加工・販売も行っています。

その活動内容と意義を講演やSNSで発信するなか、賛同者が全国から集まり、一緒に仕事をしています。応援してくれる県外の関係人口も増え、例えば東京のイベント出展の際には現地の皆さんが大勢手伝いに来てくれるようになりました。

今後やってみたいのは、この地で培った農業の課題解決の経験・スキルを、ほかの地域で活かすこと。一つの場所に固執せず、「楽しい」を原動力に、いつまでもチャレンジであり続けます。



株式会社island company 旅と暮らし事業部
ヒューマンリソースマネージャー 町田すみれさん

まちだ・すみれ ● 1992年東京都生まれ。東京都立葛飾総合高校、日本女子体育大学幼児発達学専攻卒業後、東京都目黒区の平塚幼稚園で教諭として勤務。幼稚園退職後、「おてつたび」で鹿児島県甑島のisland companyと出会い、アルバイトを経験した後、島に移住。主にFUJIYA HOSTELで勤務。

東

京で生まれ育ち、都内の幼稚園で教員として働いた後、現在は鹿児島島の西部にある甑島^{こしじま}で暮らしています。island companyという会社

に所属し主にホステルの運営をしながら、ヒューマンリソースマネージャーとして各店舗のヘルプをやりくりしてチーム全体をつないでいます。都会育ちですが幼少期から、群馬のNPOの自然体験活動に家族で参加しており、森の中で自由に暮らす経験からいつか地方で暮らしたいという想いがあったんです。

30歳になったときに幼稚園の仕事が多忙を極め、「このままでいいのか？」と考え退職。1年余り、移住先を探す旅をしました。そんな昨年の春、地域の困りごとを手伝うことで報酬を得ながら旅をするプロジェクトで現在の職場を初めて訪れました。

island companyは地元出身の山下賢太社長が「百年先の風景をつくる」をミッションに、豆腐屋をはじめとして、パン屋、行商、古民家ホステルなどを営み、島外からの移住者が働いています。それぞれ主とする担当はあるものの、お互いの業務を手伝いながら運営しています。最初は2週間の滞在でしたが、スタッフたちとの交流の楽しさが忘れられず、再度数カ月の滞在予定で訪問。そのときに、社長の妻であり食の事業部門を担当する山下麻由さんから「あなたは人を巻き込む力がある。がんばり過ぎるほかのスタッフた

ちが肩の力を抜ける新しい風を吹かせてほしい」と言っていたいただき、正式に入社することになりました。

実は同じことを高校時代の恩師から言われたことがあります。部活での悩みを他部の先生たちに相談したりしていたのです。すると体育祭のときにその先生たちが「体育祭実行委員長に立候補しろ」と。人前に出るタイプではないと固辞する私に、先生は「一人では何もできないことをわかっているからこそ、周りに声をかけて頼り、みんなで楽しく進められる。それがあなたの強みだ」と。無自覚だったその力は、幼稚園の仕事でも周囲と共に課題を解決するチームワークづくりをするときの励みにもなりました。

私たち移住者を島の人々は「豆腐屋の子たち」と呼んでくれます。甑島は人口約3500名。今は自治会にも加入して地域の清掃活動などにも参加していますが、すれ違う人に意識的に「こんにちは」と挨拶を交わしたり、豆腐屋に1日3回来てくれるおばあちゃんのおしゃべりにじっくり耳を傾けたり。そうした日常の些細な関わりも含めて、会社の存在自体が島の暮らしと地続き。風景や人のつながり、文化などを守っていくための豆腐屋でありパン屋なのです。日々働いていくことが、この島の未来をつないでいくための一片を担っていると感じながら心地よく暮らしています。

CASE
8

当たり前にそこにあった、
足元の自然で勝負する



株式会社西部建設 代表取締役
古味雄也さん

こみ・よしなり ● 1986年、高知県仁淀川町生まれ。神奈川県でシステムエンジニアとして勤務。2013年に家業の西部建設に入社、半年後に代表取締役就任。2020年、同社の新規事業として仁淀川アウトドアセンターを開設。仁淀川町観光協会および商工会副会長。



「仁 淀ブルー」で知られる清流、仁淀川の上流にある町で生まれ育ちました。大学進学とともに県外へ。「これからの時代はITだ」と、神奈川県で経営情報学を学んだあと、東京と大阪でシステムエンジニアとして働いていました。

実家は祖父の代から続く建設会社です。私が26歳のとき、父の体調悪化を機に、Uターンして家業を継ぐことに。父から「継いでほしい」と言われたことは一度もなく、自分で決めました。だからこそ、ここで生きていく覚悟ができたのだと思います。

継いだ会社の経営は、順風満帆とは言えない状況でした。建設の資格も経験もない若造ですが、社員や家族の生活を守らなければならない。その一心で、各種認証の取得やM&Aなど、自分のできるやり方で経営基盤づくりに奔走し、少しずつ成果が出るように。しかし、地域の人口減少に伴って建設需要も減っているなか、この先も建設業一本でやっていくことへの危機感は、ずっと心にありました。

突破口のヒントになったのは、あるプライベートの出来事です。Uターン以降、毎年、前職の同僚が高知に遊びに来てくれていました。主要な観光スポットは案内し尽くし、次に考えたのが仁淀川での「体験」です。川底まで見通せる透明のキャックを購入し、同僚たちを乗せたところ、みんな大興奮で雄大な自然

然と川の美しさを楽しんでくれて。都会にないものが、ここにはある。当たり前のようにそこにあった、自然という地域の財産で勝負できるのではないかと考えるようになったのです。

そして2020年、自社の新規事業として、キャックなどの体験ができる仁淀川アウトドアセンターを開設。体験の様子をドローンで撮影するサービスを始めるなど、体験価値を上げる努力を重ねています。初年度800人だった利用者数は年々増加し、25年度は年間2万人を超えました。

目の前の人の生活を守ろうと地域と関わるなかで、だんだん地域や自然環境の課題もなにかしたいと考えるようになりました。町の人口は減少が続いていますが、アウトドア事業を軸とする観光で若い世代の流入を図り、楽しい町にしていきたいと考えています。

また、自然環境の保全は、この地域だけの課題ではありません。ここでの体験を通じて自然環境を大切にしようという気持ちが芽生え、それぞれの地域に持ち帰ってくれたら——そんな思いで、アウトドアセンターの新しい空間づくりやコミュニケーションの企画を進めています。さらに、大学の先生と共同で、自然体験が人に及ぼす影響についての調査研究も始めました。小さな町ですが、ここからの発信が、広い地域の自然環境に影響を与えることだってできるのだと信じています。



伝統文化を守り、
つないでいくのが私の役割

株式会社社寺建 宮大工 後藤亜和さん

ごとう・あや●2002年、沖縄県北中城村生まれ。普通科高校を卒業後、木造住宅の宮大工として修業を開始。2023年10月より、文化財建造物の修復・復元も手掛ける株式会社社寺建に所属し、火災で焼失した首里城正殿の再建に現場最年少(当時)の宮大工として参加。

普

通科高校を卒業後、大工の道に進みました。元々は、人を守る

仕事に就きたくて警察官を目指していたのですが、建築士の父が手掛ける伝統木造建築への興味と、小さいころからものづくりが好きだったことから、大工も選択肢の一つと考えるように。大工は力のある男性の仕事というイメージもあったのですが、「ひとまず1年間やってみよう」と軽い気持ちで決めました。

初めは専門的な知識も技術もありません。伝統構法を活かした木造住宅の建築現場に見習い大工として入り、棟梁について、道具の使い方から学んでいきました。そのなかで、自分の造ったものが誰かの住む家の一部として残ると思うと嬉しくて。同時に、伝統構法という日本の文化を守る。仕事のやりがいも感じるようになり、気づいたら1年が過ぎてても大工を続けていました。

火災で焼失した首里城正殿の再建に携わることになったのは、大工3年目のとき。当初、住宅大工だった私は、社寺や文化財を専門とする宮大工の高度な仕事には関われないと半ば諦めていたのですが、父の知人を介して社寺建に採用され、当時最年少の大工として参加することになったのです。

現場では、唐玻豊※を飾る彫刻の下絵作りなどさまざまな経験をさせてもらっていますが、主な担当は正殿を支える丸柱の加工です。住宅建築とは、扱う木材の大きさも、使う道具の種類

や数も違います。先輩方に教えていたしながら、一つひとつできることを増やしてきました。

「令和の復元」と呼ばれる今回の工事には、約30年前の「平成の復元」に携わったベテランが多く参加し、私たちのような若手に熟練の技術を教えてくださっています。よく言われることのひとつが「木を見て使えない」。木は生きているので、後々に反りが出そうな部分を見極めて加工することが重要です。ベテランは「触ればわかる」と言いますが、私にはまだその感覚は掴めていません。何年もかけて体で覚えていくしかないと思っています。そして、先輩たちから受け継いだ技術を次の代へとつなげていけたら——最近では、文化を守るだけでなく、それを未来につなぐことも、私の大切な役割だと考えるようになりました。

正殿の完成は今年の秋。宮大工だけでなく、漆、瓦、電気などのさまざまな職人の仕事が集まり重なって出来上がります。あの火災から再び立ち上がった姿を見て、誰かが少しでも前向きな気持ちになってくれたら嬉しいです。

完成後、私は全国の社寺再建現場で技術を磨いていく予定です。この先、結婚や出産などを経て大工を続けることが、技術を授けてくださる皆さんへの恩返しだと思っています。そして、いつか首里城の別の棟の復元に、棟梁として関わりたい。それが今の目標です。

※唐玻豊…首里城の「顔」とも言える中央部分(写真中央)

CASE
10



地域の人の暮らし、
必要とされることをする

元農協米倉庫をリノベーションした交流拠点「Sorrisorisio」にて

編集者 中川晃輔さん

なかがわ・こうすけ ● 1992年千葉県生まれ。千葉県立東葛飾高校、慶應義塾大学環境情報学部卒業後、在学中からインターンとして働いていた株式会社シゴトヒトに入社、「日本仕事百貨」の編集を担当。2018年に編集長に就任。コロナ禍をきっかけに2021年に長崎県東彼杵町に移住し、フリーランスとなる。

5 年前に東京から長崎の東彼杵町に移住し、フリーランスの編集者として妻と1歳半の子どもと暮らしています。前職では多様な働き方や生き方を紹介する求人サイト『日本仕事百貨』の編集長を務めていました。日本全国のさまざまな働く方々の取材をする日々で、仕事と暮らしが重なる生き方に触れるうちに、地方に移住したい気持ちが湧いてきたのです。

2020年にコロナ禍で会社がリモートワークになり、働く場所の自由度が上がったことで移住計画が現実的になりました。車で移住先を探すなかで、ここ東彼杵町の景色がとても気に入ったんです。

宿泊先のゲストハウスで「移住したい」と伝えると、地域のコーディネーターとして活動をされている森一峻さんを紹介されました。森さんは地元出身で地域の交流拠点をつくったり情報発信サイト『くじらの髭』などを手掛けたりされている東彼杵のキーマン。その森さんの周りには、コーヒーやフレンチ、アンティーク、福祉とアート、お茶や宿など、さまざまな分野で自分のお店や事業を営むかっこいい大人たちが集まっています。たどり着いたきっかけこそ景色でしたが、面白い人やいいお店の存在も、このまちに住みたいと思った理由の一つです。

移住して以来意識しているのは、地域の人の暮らしとして当たり前前に生活することです。

とです。自治会や消防団に入ったり、お茶摘みの手伝いをしたり。暮らしを楽しむなかで人となりが見えてきて、プライベートも仕事においても、声をかけてもらえる機会が増えてきたように感じます。

例えばライター講座。全5回にわたって「書いて、書く」ことを学び合う場づくりを森さんたちと一緒に進めました。いきなり仕事として相談があったわけではない、日々顔を合わせて話すなかで「こんなこともできないかな？」と企画が立ち上がった一例です。県内外のライター経験者だけでなく、花屋さんや地域おこし協力隊など、さまざまな立場の20名ほどの方々が参加してくれました。また、伝統工芸の波佐見焼振興会から「会社ごとではなく産地全体で人を受け入れたい」と相談を受け、伝統産業のインターンシッププログラム『オープンハサミ』を共同で企画・立ち上げたりしました。

自分から営業をかけるというより、まず地域に飛び込んで相手の想いを丁寧に聞き、自分のもつ編集や企画のスキルを掛け合わせて一緒に新しい仕事を形にする。この流れが、私にとっての地域との関わり方です。

移住して気づいたのは、自分は家事が好きだということ。暮らしの充実をベースに仕事をするという、理想としていた生活に近づけている気がしています。